

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

第七女神
アステリア
英雄のアルキール

小説 神崎美宙

挿絵 水原 優

序章	
第一章	第七の女神
第二章	触手責めで揺らぐ心
第三章	愛する民からの陵辱
第四章	奪われた処女の血
第五章	魔辱に溺れるワルキューレ
終章	
	246
	189
	145
	096
	055
	010
	006

登場人物紹介

Characters



アステリア＝ラーレンティア

世界を統べる十二女神の一人。戦の女神。正義感が強いうえ、困っている人を見ると放っておけない優しい心の持ち主。

ミレイユ＝ミラー

悪に魂を売り渡した美女。高慢で気が強い。十二女神を恨んでいる。

ズに爆乳化させられたとはいえ、胸を揉まれたり乳首を弄られたりすると不本意ながらも
気持ちよかったが今は違う。ただ苦しいだけでなく、おぞましい魔物の触手を無理やり口
に咥えさせられているのだ。完全に失いかけていた理性が少し戻ってくる。しかし依然と
して全身は激しい興奮状態のまま、少しでも気を抜けば達してしまいかねない。

(はぁはぁ、ンはぁ……調子にのるなっ！)

口内にねじ込まれた異物を押し出そうと舌や唇を動かしてみるのが、触手の力に敵うはず
もなかった。噛みついてみても粘膜で濡れた表面は硬く、大した成果も上げられず嫌な味
が強まっただけだ。口の中で暴れる触手からはどんどんと生臭い粘液が分泌され、唇の端
から涎のようにこぼれ落ちる。

「んぐっ！ んむ……んごく、んむう……んーっ！」

触手を舌で押ししたり唇をモゴつかせても、先端は喉の奥へ奥へと侵入していく。気管が
圧迫されて息苦しい上に、喉に粘液が引つかかって呼吸困難になってしまう。酸素を吸い
込むには口の中に溜まったガモアの体液を飲み込むしかなかった。しかし口は開いたまま
なので、相変わらず両端から涎は垂れて顎へと雫が伝う。苦味の強い粘液を嫌というほど
飲み込み少し空気を吸うと、また粘液を飲まなくてはならない。脳内の酸素濃度が薄れて
きて視界が霞み、頭がボーっとして思考する能力を奪われる。

(あぁ……苦しいけど、だけど……喉が熱い……)

熱い触手の表面に舌や頬裏、顎や唇などを擦られて口の中が熱い。さらに触手から吐き出される液を大量に飲まされているうちに、いつの間にか不快感は消えていた。

亀頭型をした先端は楕円形をした扁桃を越え、消化器の粘膜まで太い幹で擦り始めたのだ。直径十センチほどもある触手が口の奥を出たり入ったりし、喉を犯されているというのに吐き気や屈辱感は薄れていた。それどころか喉の奥の粘膜を扱かれるという行為にまで身体は反応し、異常な興奮と快感を感じ出している。

(このまま触手責めを続けられたら、おかしくなっちゃうっ……)

貞操帯に守られているせいで膣やアナルを弄ることのできない分を、口に集中させたかのように喉をピストンする触手の動きは激しくなっていく。何度も喉の奥に流し込まれているうちに、もう分泌液の匂いも味も気にならなくなっていた。熱く焼けた喉の渴きを癒すために、積極的に苦い粘液を飲み込み続ける。

荒々しく責められる口内とは違い、全身に巻きついた触手の動きは逆に優しくて焦らすような愛撫だった。ゆっくりゆっくりとドロドロになった太股や二の腕、腹部などの上に柔毛を擦りつけるように這いずる。乳房には大小様々な触手が無数に群がり、揉んだり撫でたりとありとあらゆる方法で責めまくっていた。乳房はさらにサイズアップしたかのよう揺れ踊り、今にも母乳を噴出してもおかしくないほど張り詰めている。スベスベの乳肌は汗や粘液で濡れ光り、プルプルと刺激に合わせて大胆に弾む。小さくて可愛らしかつ

た乳首の姿は影も形もなく、色こそ薄ピンクのままだが興奮のあまりに乳輪は倍くらいにまで肥大化し、乳頭も痛いくらいに尖っている。そこを何本もの触手で弄り倒されているのだから、女体は堪ったものではなかった。

(き、気持ち……いいっ……もうダメ、何も考えられない……)

柔毛が背筋をなぞり、手足の肌を粘液にまみれた突起が擦る。頬や首にまで触手が押しつけられ、自慢の長い金髪すらも透明な体液で汚されていた。汗の滲むうなじや、貞操帯から淫水の溢れた内股の付け根を舐められる。乳悦で興奮は高まり、鉄板に隠された陰部は次々にはしたない粘液を漏らし続けた。その蜜を舐め取るように触手は第七女神の内股を擦り、貞操帯の中に侵入しようと股間の周りを這い回り回る。愛液を塗り込むように火照った肌を愛撫され、ぬるぬるとした感触が下半身の疼きを激しくした。

「ら、らメえ……ンごっ、ふおほだけふあ……」

女肉を直接愛撫されてはいない。それでも内股を執拗に責められて、一番疼く箇所を一切弄ってもらえず、切なくて堪らなかった。

ツルツルだった触手がビクビクと脈打ちながらホルスタイン級の爆乳を揺らし揉み潰し、乳首を抜き突つく。口いっぱい頬張った触手は喉奥を激しく抜き上げる。口内粘膜を犯す異物はその動きがどんどんと速くなり、荒々しくなっていく。アステリアは長い金髪を振り乱しながら侵入してくる軟体物を必死に呑み込んだ。

全身を快樂漬けにされ責められ続けることは、想像を遙かに超えた肉悦を与えてくれた。理性など吹き飛ばし、脳内の思考も完全に焼き切ってしまうほどに強烈だ。もう何もかも忘れて快感だけを味わいたいとさえ強く願っている。暴走寸前の性欲を前に、喉を犯される心地よさと悦びに浸っていたその時だった。

（あつ、ああ……何か来るっ！ ち、乳首から出てくる！ 出ちゃうっ！ いやっ、あ、あ、あつ……ひあああああつ！）

意識が飛ぶのを何とか堪えたものの、身体——特に葉で感度を異常上昇させられ執拗に責められた乳房は限界だった。規格外のサイズにまで膨れ上がった乳房にたつぷりと詰まっていたものが、巻きつく触手の圧力によって一気に乳腺を駆け上がる。

「イ、イクっ！ あ、あつ、何っ!? イっちゃうッ、イっちゃうのお——っ!!」

——びゆるっ、びゆくびゆく！ びゆるるるっ!!

敏感になった乳首の内側を掻きながら次々に母乳が噴き出してきた。ギンギンに勃起した乳首から凄まじい勢いで白い液体が綺麗な放物線を描き、辺りに飛び散る。

同時に、口の中の触手が今までで一番奥まで突き込まれ、膨れた先端から粘度の高い液体を吐き出した。もの凄い勢いで喉を満たし、逆流してきた液体が唇と触手の間から溢れる。視線は宙を彷徨い、アステリアは大きくむせ返った。

「ンん——ッ！ んぐっ！ ンがんぐぐうむ……んぐっ、ン——ッ!!」

喉を通り越して食道にまで達した極太触手もドクドクと脈動しながら胃へと直接白濁液を流し込んでくる。貞操帯の上からだろうとお構いなしに股間を擦りつけられ、爆乳化したメロン乳の射乳を促すように巻きつきが激しくなった。極細の触手が勃起乳首を抜き、膨らんだ乳輪を舐め回しながらビクビクと震えた。

ビュッ！ ビュルッ！ ビュルルッ！ ブビュビュビュ——ッ！

身体中に絡みついていた触手の先端からも次々に白い粘液が噴出する。

「ゲホッ、ゲフ……あひいっ！ あ、熱いっ、熱ういっいっいッ!!」

数十本ある触手それぞれから白い奔流が次々に吐き出され、アステリアの髪や顔に飛び散った。そして射精の反動で暴れ回る触手は乳房や露出した肌も白く染め、戦女神の象徴である甲冑までも汚していった。

(おっぱいがぁ……と、とまらない……)

サラサラとした乳液がガモアの身体と触手を濡らしていく。射乳の快感はあまりにも強力で甘美だった。なぜこんな状況で意識を保っていられるのか、自分でも不思議なくらい圧倒的な肉悦を身体は味わっている。

「先にガモアの方が良かったよね。でもアステリアもすぐに堕ちるはずよ……」

喉の奥ではまだビュクビュクと射精が続いている。完全に呼吸は止まり、溜まっている精液を飲み込もうにもあまりにも量が多すぎた。やっとのことで触手ごと白濁液を吐き出



すが、全身にぶちまけられたその異臭は今までの比ではない。

「げほっ、ゲホゲホッ……はあ、はあ……母乳噴いちゃうなんて……はふうん……」

焦点の定まらない瞳は虚ろ。口元は精液や涎などでぐちゃぐちゃに汚れ、髪にも大量に白粘液はこびりついていた。顎から喉元にかけて幾筋もの白い糸を引き、小手やブーツの中まで精液で溢れている。剥き出しの爆乳には特に念入りに白化粧が施され、乳肌は欲望の塊で埋め尽くされていた。勢いは失ったものの、乳首はまだダラダラと母乳を溢れさせ続けている。強烈な牡の匂いを嗅ぎ、極限まで高められた興奮と快楽に包まれ、アステリアの頭の中から女神というプライドは消えかけていた。

（私、これからどうなってしまうのだろう……）

薄れる意識の中で唯一危惧していたのは、町の人々のこと。自分はどんなに汚されてもいい、民の命だけは守りたいという気持ちだが、貞操帯の鍵の消滅に寸前のところで待ったをかけたのだ。しかしもう戦女神に貞操帯のことを考える余裕などなかった。

（でもこれでよかったのかもしれない……）

休む間もなく責められ続け、女神としての尊厳を粉々に碎かれながらもアステリアは、ミレイユに最後まで逆らわなかった。これでガモアが町を襲うことはないと思うと、荒い呼吸を続けながらもホッと安心感が胸に込み上げる。

ふと一瞬だけ表情を緩めた戦女神の身体をガモアはまだ貪ろうと触手を蠢かせている。

「結構ねばるわね……まだまだ甘かったということね。次こそは、必ず徹底的に責め抜いてあげるわ……」

胸を抱えるように腕を組んでアステリアの痴態を眺めていたミレイユは、悔しそうに唇を噛みながら呟いた。

謎の美女が首輪で繋いでいる人物は紛れもない、第七女神アステリアなのだ。その事実に気づいた観衆のざわめきがいつそう大きくなる。しかしこれが憧れていた戦女神の姿なのだろうか。上品で気高い雰囲気ではなく、女神の身体からは匂い立つような色香が溢れている。まるで娼婦のような妖艶さに、誰もが戸惑いを隠せない。

「貴様っ、アステリア様になんて無礼なことを……すぐにその縛めを解かんか！」

一瞬にして刃りが静まり返る。人ごみを掻き分け、一人の老人が現れると鋭い眼光でミレイユを睨みつけた。

「その方は世界を治める十二女神の一人。先日もこの町を救ってくれた英雄じゃ」

激しい剣幕で怒鳴りつけられても、ミレイユは眉一つ動かさずに答える。

「アステリアは罪を犯したから、こうやって捕らえられたのよ」

しかしそんな言葉を簡単に人々が信じるはずがなかった。老人に続き、次々にアステリアを信仰する者達が声を上げる。

「女神様が罪を犯しただと？ デタラメを言うなっ！」

「そうだ！ アステリア様がそんなことをなさるはずがないっ」

町人達は口々にミレイユを非難し始める。この民の声が屈辱的な調教ですっかり滅入っていたアステリアの心を温かく包む。やはり自分は間違っていないかったのだ。人々のためならどんな辛いことでも耐えることができる。そう思った時だった。

「よく聞きなさい！ 先日、魔物がこの町を襲った事件の犯人はこのアステリアだったことが判明したわ。理由は魔物退治を演じて自分の人気を上げるためよ」

この突拍子もない発言に、人々は言葉を失う。自分達を守るはずの戦女神が魔物に町を襲わせたなど、誰が信じるだろうか。一瞬の間があり、どよめきが起こる。

「もちろん証拠はあるわ。魔物の封印は女神にしか解けないのよ。突然現れた魔物とそれを退治に来た戦女神ってちよっと都合よすぎないかしら？」

ミレイユの言葉に人々は動揺を隠せない。信じたくはないが、確かに魔物の封印が解けるなど数百年の間一度もなかったのに、なぜ起こったのか。人々は意見をぶつけ合うが、誰も正確な答えなど導き出せるはずもなかった。

「女神様がそんなことなさるはずないわ！」

「そもそも人気取りなんてする必要なんてないだろう」

「アステリア様を侮辱するのもいい加減にしろ！」

それでも信仰の厚い人々はアステリアが自分達を裏切ったなどということ信じざるがなかった。ミレイユもそう簡単に事が進むとは考えてもいない。紅髪を掻き上げ、ニヤリと意味深な笑みを浮かべる。

「それならば憧れの女神様の口から直接聞くといいわ」

自信満々で言い放たれた言葉の意味を理解するのにはばらくかかった。何と魔物に町を

襲わせた罪をなすりつけようとするだけでなく、それを自らの口で人々に告白させようというのだ。あまりにもふざけた要求に、アステリアは反射的に首を横に振る。

「きゃっ！」

すかさずミレイユは鎖を引き寄せ、戦女神の耳元で囁いた。

「逆らうなど言っただけですよ。今すぐに後ろの魔物達に、ここにいる人間を皆殺しにさせてもいいのよ？」

恐ろしい脅迫の言葉だった。今、町が魔物に襲われても、拘束されているために助けることはできないのだ。自分のことを信じて、助けようとしてくれていた民の命を危険に晒すことはできない。それが例え人々を裏切る形になっても、みんなを救う方法はミレイユの言う通りになることだけだった。

そう頭では分かっているが、簡単に口にはできるはずがない。今まで全力をかけて民の命を守ってきたこと全てを自ら否定するのだ。無念さで胸が張り裂けそうだった。

「ほら、みんな待ってるんだから早く言いなさい。それとも……」

警護兵に変身させられた魔物達が前に出ようとする。

「分かったわ！ 言うから待って……」

多くの観衆が見つめる中、アステリアは口を開いた。

「わ、私が……」

どうすることもできない悔しさで声が震える。町の人々を裏切ることになってしまったのが、何よりも辛かった。

「魔物に、町を襲わせました……」

言い終わった瞬間にギョッと唇を噛みしめる。搾り出すような細かい声ながら、放たれた言葉は静まり返った観衆に多大なるショックを与えた。ほとんどの者がそれでも信じることができないといった様子で、困惑の表情を浮かべるばかりである。

（そうよ、こんなことしたって人々が信じるはずないわ……）

動揺している民を必死に見つめるアステリア。しかしミレイユはそんな女神の淡い期待を打ち砕くのように、観衆の方に視線を移して提案した。

「今日はアステリアが謝罪と反省の意味を込めて、皆さんに奉仕するわ。憧れの女神様に相手をしてもらいたい者は前に出ていらっしやい」

今日一番のどよめきが起った。誰もが憧れる戦女神様に奉仕してもらえるなど、こんな機会は今を逃せば二度とないだろう。しかしだからといって、簡単に名乗り出ることでもない。町の人々を救ってくれたアステリアをまだ信じている者は少なくなく、そんな女神を汚すようなことをすれば確実に周りから白い目で見られてしまう。そのため男達は興奮で胸を膨らませながらも、様子を窺っているばかりだった。

「情けない男ばかりねえ……ちゃんとチ○ポついているのかしら？」

いつまでも希望者が現れず、ミレイユは少しイラつきながら声を荒げる。挑発的な言葉に数人の男が眉を顰め、その中の一人が群衆を掻き分けて現れた。

「俺は魔物に妻を殺されたんだ。本当に戦女神様の仕事なのか？」

背が高く色黒で体格のいい男はアステリアをジロジロと観察するように眺める。

「わ、私は……」

心臓が握り潰されたかのようにズキリと痛む。心優しい戦女神は自分の身よりも、家族を失った男の心中を思い悲しみに沈んだ。守ってあげられなくてごめんなさい。力なく首を振るアステリア。

「ほら、答えなさい」

警護兵に変身した魔物が男に近づく。この人を救うためにはミレイユの言うことを聞かないのだ。それが人々から罵られるような結果となっても。

「私が……魔物に、町を襲わせました……」

まっすぐに男の目を見ることができない。屈辱と絶望にまみれながらアステリアは目元には涙を浮かべ、全身を震わせながら静かに言葉を搾り出した。

言葉では肯定しつつも、その表情は明らかな否定だった。多くの観衆はそれを感じたのか、捕らわれてしまった女神を哀れむ声が聞こえる。しかし男は違った。いやらしい笑みを浮かべながらアステリアに近づいていく。

「そうか、それならちようどいい。妻が死んでから溜まっていたんだよ。女神様が責任を取って処理してくれよ」

再びどよめきが起こる。男を罵る声も上がるがミレイユが一睨みすると、人々は黙って女神を見つめることしかできなくなった。

「ふふ……そういう男は好きよ。心ゆくまでアステリアに奉仕してもらいなさい」

突然の展開にアステリアは表情を強張らせる。味方だと思っていた民に自分を辱めようとする者がいることがショックだった。しかし彼にしてみれば、自分は家族を殺した犯人なのだからこれは仕方ないことかもしれない。これ以上、人々が魔物に傷つけられないためには汚名を被るしかなかった。

「ほら、フェラチオをするのよ。両脚を揃えて跪きなさい」

金髪ごと頭を押さえつけられ、アステリアは言われた通りに両脚の内股を合わせて膝立ちになった。誰もが憧れていた美麗な戦女神が足元に跪いているのだ。見上げる潤んだ瞳も悩ましげに揺れる乳房も、その扇情的な姿が男の興奮を誘う。

「あぁ、アステリア様に舐めてもらえなんて最高だぜ」

男は民衆に見られているというのに、恥ずかしげもなくズボンを脱ぐと猛った肉棒を取り出しアステリアに突きつけた。魔物だけでなく、人間のペニスまで舐めさせられるのかと、女神は気が遠くなりそうになる。

(こ、これも人々を救うためよ……)

そう自分に言い聞かせ、覚悟を決める。薄ピンク色の唇を震わせながら小さな口を開いた。男は嬉々として肉棒の根元を指で固定しながらその先端を近づけてくる。

「うう……」

生まれて初めて見る人間の男根は、生々しい造形をしていて気持ちが悪い。目の前に突きつけられた特大の肉勃起は、処女の女神には刺激が強すぎた。先端は半分ほどまで包皮に覆われているが、淫水焼けした赤黒い亀頭が覗く。ぱっくりと開いた鈴口から滲み出た先汁がヌラヌラと妖しく輝き、幹に幾筋もの血管を浮かばせて本人の意思とは関係なしに脈動する。砲身はその雄姿を見せびらかすかのように天に向かってそそり勃っていた。太く濃い陰毛がペニスの周りをびっしりと囲み、その下にぶら下がる二つの睾丸を包む肉袋は拳ほどもあって、中心に一本の太い筋を浮かび上げらせパンパンに膨らんでいる。

不気味な威圧感を誇る男性器にアステリアは哑然とした。見た目も然ることながら、鼻につくムツとした生臭い匂いに思わず顔を背けてしまう。本当にこんな不潔なものを舐めさせようというのか。嫌悪感のあまりに、明らかに顔を擧める女神に、男が不満を漏らした。

「おいおい、奉仕してくれるんじゃないのかよ？」

欲情した男は嫌がるアステリアの瑞々しい唇に己のペニスを擦りつけた。観衆からは悲

鳴に近い声があちこちから上がる。憧れ尊敬していた女神が今日の前で辱められているのだ。男根はそれでも容赦なく口内に侵入してこようとすする。

「あうっ……」

唇に異臭を放つ熱棒が触れて、生温い粘液を口の周りに塗りたくられる。女神は反射的に歯を噛みしめ、それ以上のペニスの進行を阻んだ。

「反抗するなど言ったでしょうっ！」

いつの間にかミレイユの手には乗馬用の鞭が握られている。細革を編み込んで作られた黒い一本鞭が風を切ってしなつた。

「きゃひいッ！」

鋭い痛みが背中に走り、思わぬ一撃にアステリアは悲鳴を上げる。自分は拒否権など存在しない立場なのだと改めて思い知らされた。

（この人が悪いわけじゃないわ……）

気を落ち着けて突きつけられた男根に向き直り、おずおすと舌を差し出した。今までは無理やり口内に触手をねじ込まれたことはあったが、自分から生殖器を舐めるなど初めてのことですればいいか分からない。伸ばした舌先が熱い肉棒に触れると、反射的に顔を引いてしまう。

（うう……嫌な味、だけど我慢しなくちゃ……）

口内に強烈な先汁の味が広がるが、再び肉勃起へと舌を伸ばしていく。

「やめてっ！ ああ……アステリア様が……」

「そんな奴らやっつけてください！」

憧れていた麗しの戦女神が男のペニスを舐めさせられている。観衆は騒然となり、アステリアの反撃を必死に願うが、その思い空しく陵辱は進んでいく。

（皆さん、本当にごめんなさい……）

人々の願いに応えることができず、悔しさと惨めさが込み上げる。屈辱に耐えながら口を男根へと近づけた。

「チュ、ペチャ……」

ペニスが上向きに反っているために、伸ばした舌先は鈴口よりも少し下に触れた。必死に突き出した舌の上面に先汁の苦くしょっぱい味が染み込んでくる。上に昇るにつれてその味はきつくなり、先端までなぞるとペロンと舌先が捲れた。その反動で弾かれたペニスが震え、口腔に男性器の味と匂いがいっぱい広がる。

異様に静まり返った広場にはピチャピチャという舌粘膜と男根が触れ合う卑猥な水音が響く。いつの間にか周りにはアステリアの痴態に熱い視線を注ぐ者達が増え、哀れむような声は少なくなっていた。それどころか醜い男根を舐めさせられて、端正な美貌が歪む姿に観衆の興奮は高まっていく。男は戦女神の唾液で濡れてヌラヌラと光る肉勃起を自慢げに



何重にも連なったノコギリ刃のようなペニスが腸壁を引っかき、内臓ごと引きずり出されてしまうのではないかと思うほどの激しい感覚だった。

「きひいいいっ！ お尻い、オマ○コもお……えぐられちゃううっ!!」

反対に岩石のごとく硬い肉棒が膣肉を割り裂き子宮口をグリグリと押し上げる。体内を肉棒で掻き回されている凄まじい感覚に、背筋は震え股間は腸液と愛蜜で大洪水状態だった。

「おらおら、休んでんじゃねーよ」

目を白黒させながら口をパクつかせている女神に、魔物達の容赦のない肉棒責めが再開される。身体の外側から内側からと擦りつけられる異形ペニスに包まれた途端に、あれほどのアヌスの痛みが不思議な感触に変化していく。

「うっ、うあんっ……ね、変なおっ！ 身体があ、おかしくなっちゃうっ……」

肉棒を手のひらで、口で、膣で、乳房で、全身で感じ、怒涛の勢いで流れ込んでくる肉悦に女神の意識は翻弄されつばなしだった。思考する暇も与えてくれない魔物達の激しい腰使いにつられるように、アステリアの奉仕の速度も増していく。

「くくっ、いいぞ！ もっといやらしくケツを振れっ」

摩擦熱で火傷しそうになるほど先汁を絡めた指先でペニスを抜き、鼻を鳴らしながら唇と舌先で肉棒を愛撫する。自然と動き出した腰のうねりは止めることができず、母乳を撒

き散らす乳房を淫らに揺り躍らせた。戦女神の動きに合わせてスカートは捲れ上がり、鉄製の甲冑同士がぶつかってカチャカチャと音を立てる。

「だんだんと、ケツ穴もほぐれてきたなっ」

あさましい姿を晒し乱れる戦女神の痴態に興奮を掻き立てられた魔物達は、欲望のままに男根を身体に押しつける。肛門を犯している肉棒の動きも徐々に速度を上げていき、膣と遜色ないほど滑らかにピストンを繰り返す。

「ひゃ、ああふぁ……おしりい、が熱ういのお……あひいつ、あぁんツ!!」

充滿する牡の香りに毒された脳は、排泄器官に感じていた違和感を快感として認識し始めていた。禁断の肛悦という快楽を覚えてしまった身体は、もう二度と正常には戻ることのできない淫堕の泥沼へと堕ちていく。

「おらっ、アナルでも感じてるんだろ？ 変態女神様よおっ！」

肉の悦びには逆らえず、膣や肛門への挿入をねだるかのように激しく腰をうねらせてしまう。暴走した欲情は止まる所を知らず、牝本能のままに肉棒を貪った。

「は、はいつ、そうなんですっ！ あ、あはっ、わ、私はお尻で感じちやう変態なんですっ！——っ!!」

命令されなくても自然と口から溢れる恥辱のセリフ。淫語を叫び散らすと胸の奥が羞恥の炎で火照り、どうしようもない嗜虐的な興奮が胸を昂らせる。

「うっ、こっちの締まりもキツクなりやがった」

一瞬間を翳めた魔物は戦女神の細腰をがっちりと掴んで固定すると、今までも増して乱暴に腰を突き上げ始めた。岩のように硬い男根で突き上げられ、異物感の拭えない激しい責めに膣内は悲鳴を上げる。肌を叩き合い淫水の飛び散る水音が響き、華奢な身体はされるがままに激しく跳ね踊った。

「んひあっ！ オマ○コとお尻でゴリゴリいつてるのおっ！！ オチ○ポがズボズボって、しゅごっ、しゅごひいいい——っ！！」

膣壁と直腸を凄まじい速度で肉棒が入りし、巨大なカリで搔き回され蜜と腸液が溢れて結合部を濡らした。また荒々しいピストンによる桁外れの肉悦が股間を中心に全身に広がり、脳髓を呑み込んだ。あれほど射乳したにもかかわらず、乳房はパンパンに張り詰めて硬い肉棒で弾かれた乳首がジンジンと痺れる。

「ひやははっ、口マ○コが気持ちよすぎて、イっちまいそうだぜ！」

喉奥に突き込まれる剛直。息苦しさを意識が朦朧として何が何だか分からなくなり、夢中で唾液で濡れた舌を太幹に絡ませ、両手に握っている逸物を扱き上げた。

「俺も射精そうだっ！ たっぷりぶっかけてやるからなあっ！！」

身体中に擦りつけられている魔根の先端が膨らみ、プルプルと小刻みに震え始める。二本の肉棒が交互に突きと抜きを繰り返し、膣と腸の間の薄壁が激しく擦り上げられてアス

テリアは呂律ろれつの怪しい口調で絶頂が近いことを訴えた。

「あはっ、ひゃあぁんっ！ は、激しすぎるうっ!! あ、あっ、ひゃあぁあぁッ!!」

これでもかというほど深々と剛直を突き入れられ、否応なしに絶頂の極みへと押し上げられてしまう。意識が飛びそうになるほど激しい絶頂の大波が襲ってくる。その激情に身を委ねてしまうことに不安と期待を入り混じらせながらも、もはや押し迫ってくる頂は自分ではどうすることもできなかった。

「きゃひい、くるっ、きちやうのお——っ！ おっきいのが来るうううッ!!」

魔物達の腰使いもいよいよ切羽詰まった、猛々しいものへと変化する。淫悦に蕩けたブルーの瞳の端から涙を流し、肉棒にしゃぶりつく唇は涎と先汁で汚れていた。腕の筋肉が疲労で痺れているのに、ペニスを扱く手の動きは止まらない。汗の滴る身体は母乳と精液でドロドロになり、さらなる施しを求めて胸を高鳴らせ始める。

「もうダメえっ！ き、気持ちよすぎて……はぁんっ！」

魔物と女神の腰の動きが重なり合い、一気に頂へと上り詰めた。目の前が白く弾け、脳の思考回路が焼き切れる。子宮で発生した快楽電流は瞬く間に全身を駆け巡った。

「おらっ、口に射精だしてやるから全部飲めよ！」

「うっ！ イクっ、そのエロい顔にぶっかけてやる!!」

ビクビクと震える射精寸前のペニスを唇に押しつけられ、半狂乱になって腰を振っている

る戦女神は言われるがままに口を開き舌を伸ばした。

「ひゃ、ひゃいいっ！ 飲ませてっ、飲ませてくださいいっ！」

手淫を味わっていたペニス達まで口元に狙いを定めている。アステリアは精子を受け止めやすいように顎を上げ、大きく口を開いて恵みの雨を待った。

「うおっ！ 射精すぞっ！ たっぷり膣出ししてやるからなッ!!」

「こっちもイクぞっ！ 尻穴で存分に味わいなっ!!」

直腸を貫いている魔物と床に寝転がり膣を犯している魔物が高々と腰を突き上げ吠える。全身に押しつけられた肉棒。柔肌の至る所に擦りつけられている魔根達が、一斉に射精を開始した。

どぶっ！ どびゅっ、びゅぶゅどびゆる！ どびゅどびゅどびゅううう——っ!!

「ひゃあああっ！ あ、あつ、いっ、イクっ、イクイクう——っ!! せいえきぶっかけられて、いっちやうのおおっ！」

おぞましい魔液を膣とアナルに流し込まれ、妊娠の二文字が薄れゆく脳をかすめる。しかし目の前は絶頂で白く霞み、その恐怖すら塗りつぶしてしまった。

無数のどす黒い魔根は次々に果て、アクメに達して悶える戦女神の身体に白濁液が降り注いでいく。男根は一発ごとに脈打ち、打ち出された魔液は放物線を描きながら金色の髪、蕩けた美貌、露出した乳房、肉感的な太股を襲い、正義の象徴である甲冑から羽衣のよう



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>